

# 政令市型保健所の 医師として

50歳の私が「期待の若手」と言うのもおかしいのですが、若手だった時代を思い出して、いままでの行政医師としての経験を書きとめたいと思います。公衆衛生にかかわられる皆さまに、政令市型保健所医師の仕事の一端をお伝えできれば、幸いです。

## 公衆衛生に興味あるも 最初は放射線科医に

私は宮崎県の地方都市の出身ですが、実家の近所に病院とともに保健所もあり、「保健所も医師が務める職場のひとつである」と認識しており、なんとなく保健所を身近に感じていました。

熊本大学医学部の学生時代も公衆衛生学に興味があり、熊大公衆衛生学の伝統の実習である「保健師との同行患者訪問」もはじめに取り組み、患者宅や主治医へ保健師さんと一緒に訪問させていただき、レポートをまとめるために何度も熊本市保健所に足を運びました。

しかし、医師になった際は、当

時いけば興味があった放射線医学に進むことにしました。

放射線医学はとても楽しく、画像診断にがん治療までと範囲も広く、放射線科専門医も取得できました。

がん治療を担当していたころは、がん検診を受診し早期発見され治療に結びつき完治していく患者さんもいらっやいましたが、残念ながら進行がんが見つかり姑息的な治療しかできず、その後、いまいちうホスピス的な治療を担当し最期をみとめるケースも多く、がん対策については臨床で個別ケースごとに頑張るだけでは限界を感じ、予防医学の大切さを実感していました。医師になって9年目でしたが当

時の熊本市保健所長と知り合う機会があり、「公衆衛生に興味があるなら、保健所に勤めないか？」と誘われる形で、熊本市保健所に採用になりました。

それまでの臨床経験（人体のすべての臓器を対象とする放射線医学の知識）は、行政に入ってもとても役立っており、特にがん検診などの2次予防は得意分野となりました。

また、臨床時代に勤めていた熊本大学附属病院や熊本市民病院には知り合いも多く、熊本市医師会にも同期の医師がいたりして、行政の仕事を進めるうえで大きな財産になりました。とは言っても、保健所に採用になるまで行政医師の具体的な仕事の内容はよくわからず、最初は「決済文書のはんこの押し方」から事務職の方に教えてもらったりしていました。

当時の熊本市保健所は築40年の古い建物でしたが、職場はアット

にはあまり知られていませんでした。そこで、「熊本市は、医療体制が充実しているので、安心して暮らせる」ことを啓発しようと職員に提案したところ、保健所が中心となり「くまもと医療都市ネットワーク」と銘打って医療拠点都市としての熊本市の啓発を行うことができました。

熊本市保健所感染症対策課には5年おりましたが、その間にSARSや新型インフルエンザ、結核やエイズ対策を経験し、医師としての技能も思う存分発揮できたと思います。

私は、臨床時代あまり研究をするタイプではなくアカデミックな分野には無縁だったのですが、行政に携わり頑張っている医師ということで、熊本大学医学部公衆衛生学の加藤貴彦教授がお声をかけてくださり、非常勤講師として医学部の公衆衛生学講義を担当させていただきました。まさか母校の講師を担当できると思っていなかったもので、とても光栄に思っています。

講義では、健康危機管理を中心として公衆衛生行政のおもしろい話をするように心がけています。幸いなことに学生には毎年好評で、講義終了後に「私も、行政医師に興味があ

ホームな雰囲気です。医師以外の他職種の方もとてもよくしてくださって、行政にもすぐに溶け込むことができました。

## 政令市型保健所の医師とは

ここで、政令市型保健所の医師の仕事についてお伝えしたいと思います。都道府県型保健所でも担当されている通常の公衆衛生行政に加えて、市町村業務の保健師の実務も担っています。母子保健の1歳6か月児健診や3歳児健診の診察も週に2回ほど担当しますが、これは医師としての臨床的機能を維持するうえで役立っています。私が採用されたころは、BCGやポリオなどの予防接種の実施も大きな仕事量でしたが、これは全面委託になりました。また、成人保健の生活習慣病対策として、各種の予防教室なども担当します。

平成24年に熊本市が政令市と

あるんですけど声をかけてくれる学生が出てきており、その際には熊本市だけではなく全国の保健所などに医師の職場があることを伝えていきますので、将来の行政医師の採用に多少は貢献できるかもしれません。

## 行政医師の技能の活用

行政において、医師も一人では仕事ができず、他の職種の方との連携が大切になります。逆に、医師としての技能が他の職種の方のお役に立てることも多いのではないのでしょうか。私は、職場の保健師の方々と生活習慣病の勉強会を開催しておりますが、毎回好評で保健師のスキルアップにも貢献できていると思います。皆さまの職場の行政医師も、医師の技能を發揮したいと考えていらっしゃると思いますので、相談をされてみてはいかがでしょうか？

行政医師は、自分の技能を發揮しつづ長く勤めることにより、長期的な成果が実現できることがやりがいだと思います。仕事と家庭の両立もでき、家族も「行政に勤めてよかったね」と言ってくれています。この拙文を読んでくださった方が増えれば幸いです。



熊本市民区保健子ども課  
(兼) 熊本市民保健所医療  
政策課医療主任

佐藤 龍一郎

昭和63年熊本大学医学部卒業。同大学附属病院の放射線科医として勤務したのち、平成8年熊本市民保健所に採用され、感染症対策、健康づくり推進課、東保健福祉センター勤務を経て、24年4月より現職。

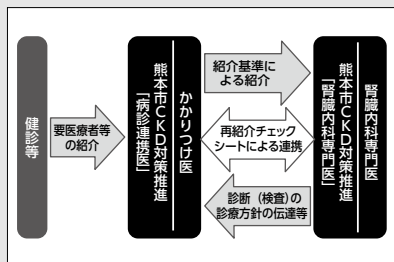
なり、精神保健センターや児童相談所などの新たな医師業務も増えて、現在は保健所・区役所保健センター・精神保健センター・子ども発達支援センター・児童相談所に9名の行政医師が在籍しています。仕事と子育ての両立ができていうメリットから、近年は若手の女性医師の採用が増えています。行政医師どうしの連携もうまくいっており、女性医師の産休や育休取得の際は相互応援で対応します。

## 医師としてのアイデアが 施策として実現

行政では、臨床と違って医師一人では仕事ができませんが、医師としてのアイデアが行政施策として実現を結ぶことを何度か体験しました。

ある日、国保担当の保健師が血相を変えて訪ねてきて、「国保の赤字を減らすための目玉政策を、近中に市長へ提示しなければならぬ」と言うのです。そこで、当時熊本県が日本一多いといわれていた人工透析を切り口として、慢性腎臓病CKD対策として「腎臓内科専門医とかかりつけ医の連携システム」を提案しました。これはその後、熊

図 熊本市民CKD対策推進病診連携システムのイメージ



本大学医学部等の腎臓内科専門医と熊本市医師会のかかりつけ医の協力を得て、熊本市独自の「CKD対策推進病診連携システム」として実を結びました。その後5年間の取り組みで、実際に人工透析の新規導入者を12%減らす成果（年間295人が260人に減少）を上げて、全国的に注目されています。

また、熊本市は熊本大学附属病院や各公的病院がうまく機能分担をして、熊本市医師会の各医療機関の協力もあり、救急医療やがん診療などの連携がうまくいっています。このことは一般の市民の方